

連載



◇別海町の概要

別海町の由来は、町の中央部を流れオホーツク海に注ぐ西別川の「折れ曲がっているところ」を意味する「ベツ・カイエ」のアイヌ語から転化したものである。この名前のように、明治の初期までは広大で未開の根釧原野を熊や鹿その他の野生生物が跋扈し、アイヌの人たちがそれら自然の恵みの一部を狩猟という形でいただいて生活してきた。

この地区の農業は明治十年、石川県から一二戸一人が原野に移

あのマチ・地域おこし活躍中 このムラ

No.21

別海町の事例

住し牛馬の繁殖を開始したことに始まる。そして明治十七年、短角牛による牛乳の生産が始まり、これが別海酪農の始まりと言われている。

明治四十三年第一期拓殖計画によつて土地の貸付等の奨励制度が確立し入植者が飛躍的に増加した。そして昭和二年から始まる第二期拓殖計画は、道の農業奨励策として入植開墾に弾みがついたが昭和四年そして六、七年と道東を襲った冷害凶作によつてとん挫しかかった。マスコミまでが「別海地方

を含めた根釧原野は農業不適につき放棄すべき」との声をあげたが、昭和八年の主畜農業五ヶ年計画によつて乳牛を中心とする酪農に転換する事で経営が安定し入植農家も増加した。それを受けて昭和十五年には雪印乳業が西別に工場を設置、その後明治、森永も工場を設置し本格的な酪農の拠点となつていった。

昭和三十一年に高度酪農集約地域に指定されて以来、何年かおきに繰り返す冷害凶作という不安定な畑作から酪農への全面転換が進

み、草地開発事業の推進や農業機械の近代化により規模拡大を図ってきた。特に昭和四十八年に新酪農村がスタートしてからは、農業施設、機械の大型化・近代化がいつそう進行し、現在、管内の乳牛飼養頭数は一〇万七千頭を越えて、文字どおり全国一の酪農王国となった。

町の総面積は一三万二千鈴、これはおなじ道内の足寄町に次ぐ全国二番目に広い町である。うち耕地面積は六万三千鈴。地質的には土壌の隆起陥没による海没隆起が繰り返された洪積層の上に阿寒、屈斜路の火山活動による火山灰層が乗る典型的な火山型地質となっている。火山灰は西部に行くほど厚く堆積している。

◇別海町の経済

平成八年の産業別生産(出荷)額を見ると、町全体で一千三六七億円のうち農業が二九・一%の三九八億円、漁業が同五・六%の七六億円、約三分の一であるが、工業の六二・九億円の大半が牛乳を中心と



北海しまえびの打瀬網漁

表 1 産業別生産（出荷）額（平成 8 年）

	農 業	漁 業	工 業	商 業	計
生産額（億円）	398	76	629	264	1,367
構成比（%）	29.1	5.6	46.0	19.3	100

資料：農林水産統計 北海道水産現勢 別海町調：工業 商業生産額

する加工産業であることから、第一次産業の町と位置づけられる。（表 1 参照）

漁業は、定置網による秋サケ漁と小型船によるホタテ、エビ、ホッキ、ウニ、カレイ漁などが主力の沿岸漁業である。中でもサケとホタテは全生産の七〇%を占めている。

近年は「獲る漁業」から「育てる漁業」へと転換を図り、安定した漁獲量を確保できている。更に風蓮湖でのニシンの稚魚の放流やウニ種苗センターにおける増殖事業が軌道に乗るとますます資源培養型の産業基盤が確立される。

また、野付湾で行われる、叙情豊かな打瀬網漁でとれる北海しまえびは、地元だけでなく別海を訪れた観光客のおみやげの目玉商品となっている。豊かなオホーツクの恵みは、ホヤやつぶ、栗ガニと言った未利用の海産資源をまだまだ

◇酪農の現状

人口は昭和三十五年の二万一千

八七八人をピークに減少を続け平成十年で二万七千四八三人に二〇%減少している。この大半が農家の離農である。これの裏付けとして農家戸数は昭和四十年二千一三三戸あった農家が平成十年の速報値では一千六三戸になった。それでも近年は平均年間二〇戸の離農に下げ止まっている。これはおそらく日本全体、特に北海道の経済不況による就職難、そして色々な状況ではあるが乳価の安定が、農家にとって将来展望を描きやすくしているのではないかと。

特に、経営規模の比較的大きな経営を見るとフリーストール化は勿論、限られた労働力を最大限に利用するための様々な工夫が実行されている。

それは例えばミルクングパラーの方式の選択にも見られるし、飼料収穫作業や、糞尿処理をコントラクターに任せる農家、極端なところでは育成を切り離して搾乳一本という農家まで様々な試行錯誤が特に若手後継者の手によって

試みられている。これは、将来に向かう細胞分裂のような物で進歩発展に不可欠の要素であり、残念ながら他の農業形態には見られないほどの活力を感じる。

ちなみに、平成九年のフリーストール普及率は一・一％。ミルキングパーラーに普及率は九五％であるが近い将来それぞれ三六・一％、三三・一％の農家が導入を希望している。

◇新酪事業

別海と新酪事業は切り離せないが、この事業の一部は根室市及び中標津町を含んで、昭和四十九年から五十八年のおよそ一〇年間で延べ総事業費九三五億円をかけて一万五千一五三杉の農地を造成し、そこに新規入植九四戸、移転入植九七戸、肉牛牧場四戸の合計二二六戸が壮大な夢を抱いて入植した。そのうち平成十年現在、一八一戸が営農を継続している。中にはすでに後継者に経営を移譲し二代目になっているところもあるが、何

らかの事情で離農に追い込まれた入植者が四五戸という数字は、この間の出荷規制、乳価の低迷と言った酪農環境の激変と深く連動している。

離農の理由を町の資料から分析してみると、必ずしも単独の理由とは限らないが経営不振が関係しているのが三三戸と全体の七三％を占める。また後継者不足が関係している農家が七戸、事故、病気と言った基幹労働力の問題が四戸ある。

一方で、様々な試練を乗り越えつつある残存農家であるが、平均四千万円を超える売り上げを上げ、所得の平均も一千三〇〇万円を越えている。これらの指標をどう評価するかは意見の分かれるところであろうが、見方によっては八郎潟と並んで国家事業として取り組み成功した数少ない事業の一つといえるのではないか。

確かに、新酪を見渡せる展望台に建つと事業の無駄の代名詞と批判されるタワーサイロが林立しど

こかアメリカ力中部にいるような気分を味わうことが出来るが、様々な批判の中で手探りで事業を遂行した関係者と現地で文字どおり汗を流した農家の皆さんの努力を評価したい。

◇「別海町農業振興計画」

町では関係する四農協と共に平成八年三月、酪農・畜産の目指す方向、計画実現のための方策等を内容とする「別海町農業振興計画」を策定した。この中の主な酪農振興施策を見ると第一に担い手の確保・育成のための施策が目を引く。この中には、①酪農研修牧場の建設②新規就農者対策事業③新規就農環境整備事業④農場リース円滑化事業⑤酪農経営リレー円滑化事業といった新規就農対策が目白押しである。ただ一つ農業後継者支援事業が後継者の親から引き継いだ負債召還対策としてあげられているが、別海町の新規就農者支援の意気込みが感じられる。また経営体質の強化としていく



酪農研修牧場研修棟

つかの施策が掲げられているが、基本として、経営規模に関しては現状を基本として負債をなくし足腰の強化を目的としているように感じられる。それでも、草地基盤の整備事業については、現在すでに道営草地整備事業が二地区、畜



町営酪農工場製品

産基盤再編総合整備事業が四地区で進行している。

◇酪農研修牧場

中でも酪農研修牧場は平成九年から、基本的に三年間の実践を主体としたカリキュラムの研修生の受け入れを開始し、初年度夫婦五組、独身者（男性）二名の二二名を受け入れ、平成十年は七組の夫婦を受け入れしている。ほとんどが道外出身者でそのうちすでに町内に就農した受講生もいる。酪農は草地管理と共に牛の飼養という専門技術の習得が大変なために隣の浜中町と共にこの研修牧場が新規就農促進の鍵を握ると期待される。

その他事業の中で注目されるのは、農村・農家情報ネットワーク構築事業と町営酪農工場の運営である。当面は気象情報や乳検のデータ情報の発信から初めて、クミカンの入力から将来的には、生産コストまで含めた農家個々の経営分析まで出来る情報管理を目指し

ている。町全体のコンピュータシステムの構築によって農家個々に様々なシミュレーションもコンピュータ上で可能となり、より経営者としての能力を発揮できるのではないか。現在農業高校や農業大学で修得するコンピュータ技術が実践の場で生かされる時代がすぐそこまで来ている。

また町営酪農工場だが、最近個人の酪農家がアイスクリームやチーズと言った乳製品の生産販売を手掛けるところが多いが、町でブランドを取得してブランド展開を昭和四十九年から手掛けているところは無いのではないか。バター、チーズを始めアイスクリームからパバロアに至るまでたくさん製品を開発してきたが、中でも乳飲料「こめちち」は発芽玄米と人参をベースト状にして牛乳と混ぜた栄養豊かな飲料で、平成六年優良ふるさと食品コンクールで農林水産省食品流通局長賞を受賞している。このように様々な酪農加工品開発と販売に取り組んでいるが、

なんと言っても工場の基幹となっているのは瓶詰め牛乳である。平成九年全処理量六〇〇トのうち五〇〇トを飲用乳が占めているが、これがおかしい。最近瓶詰め良さが見直されて宅配も復活しつつあるようだが別海ではかたくなに瓶にこだわってきた。確かに紙パックと中身は同じでもおいしいような気がするのは、昔、朝早くに隣に宅配された牛乳をしっかりと記憶のせいだけではないと思う。

別海酪農は冷涼で厳しい自然条件、そして国の政策及び外庄による農業情勢を反映して文字どおり激変の嵐を経験してきた。しかしその中であって、したたかに基盤を確立し次世代に引き継ごうとしている。今後の酪農情勢も決して平坦な道とはいえないだろうが、今までの経験と、今若い世代が取り組んでいる真摯な気持ちをもつてすれば必ず未来は開かれると思う。

（レポート）

専任研究員 斉藤勝雄